



特定営利活動法人 生きものと食べものの未来

令和 8年 2月

では、「生き食べ未来通信」 2月号をお届けいたします。

- ・ 巻頭言.....
- ・ 活動紹介..... 1月の活動実績 / 今後の予定
- ・ コラム：私の提言..... 生かされているよろこび/中国は王道の選択を…/不登校は本人、親の責任であり、子どもの躰は大人の責任である。
- ・ 伝えたい・紹介したい記事… さらに秀才、鍛えろカラダAI時代備え月10万円保育園に…/「脱炭素」が生む新たな環境負荷…/農産物輸出に甘くない現実、ブドウは…/「絶滅寸前」繰り返した人類 寒冷化で…/AIデータセンター、大量の水消費 懸念…/脳科学で迫る幸せの秘訣…
- ・ 投稿コーナー..... 協力依頼/会員の方のご感想
- ・ 新規にご加入・ご寄付の方…
- ・ お知らせとご案内..... 会員からの投稿を募集など
- ・ コーヒーブレイク..... 推薦図書
- ・ 編集後記.....



卷頭言



2月になりました。旧暦で如月、言葉の響きと文字に風情を感じ、厳冬の中でも春の兆しを感じるこの頃です。今年も年明け早々にトランプ大統領のベネズエラ攻撃という暴挙で始まりました。昨年もトランプ大統領に振り回されました。衆議院の解散、高市首相の軽率な発言、2026年どんな影響を及ぼすのか不安がつきません。1月25日で当NP0は丸2年を迎えることができました。そして、《生き食べ未来通信》は、20号になりました。これからもみなさんに政治・経済、農業、環境、教育、様々な分野のホットな情報をお届けします。

5年前の2月、オホーツクの流氷を観たくて知床に行きました。チェックインまでの時間を利用し、知床自然センター、既に閉門4時の直前、無謀にも直前に手続きもせずに無人になっていた入口から入り込みました。エゾシカを見るためです。遠くの丘に数頭のエゾシカを見て帰ろうとしたところ、来た雪道にエゾシカが2頭、1頭は大きな角があるオスジカでした。鹿が動かず、夕やみが迫って来る。白銀に世界で、一歩足を外せば、ずばっと入る雪の深さ、一緒に行った竹田津さんが大きい角が生え馬みたいに大きく見えたオスジカとにらめっこ。怖くて写真を撮る余裕もなく、シカが立ち去るまで数分が非常に長く感じました。シカが去って夕やみが迫る雪の中、氷点下にかかわらず汗だくになり、雪に足を取られながらも走って逃げかえりました。今ならクマが怖くて絶対いきません。やはりルールは守らないといけないと反省しきり、この季節になると思い出します。

ことしの年始は、新聞や雑誌、また、交流した大学の先生、生成AIの話題満載でした。大学では論文を書くのにAIを利用、その審査にもAIを利用するという。信じられないことが現実になりつつあります。日経ビジネス年末年始号では「AIファースト経営」の特集が掲載されました。特集最後の記載「AIは格差を拡大すると言われるが、格差を是正するためにAIを利用する、そのために人間の知恵が必要である。」という。正に同感であり、救われました。これからは知識と知恵、理性と感性、倫理と哲学、文理融合した知性が益々重要になって来ると感じます。知らなければ知らないで済まされ、義務教育レベルの知識で生きていくことも充分可能です。しかしながら、より豊かな人生を生きるとなると影響を与える情報収集や知性は必要です。そのためにも当NPOの活動がみなさんの価値観や未来の生き方に少しでもお役に立つきっかけになればと願っています。

先日久ぶりに有機農業で「とよみつひめ」や「秋王」を栽培・加工・販売している知人を電車とバスを乗り継ぎ、2時間かけて訪問しました。知人から「有機レモン」の栽培を始めた報告や有機農業に関する相談を受けました。私は、持参した農文協の「耕さない農業」や有機農業団体の紹介を行いました。当NPOではこんなことも行っています。みなさんからの相談や忌憚のないご意見をお待ちしています。

特定非営利活動法人 生きものと食べものの未来 理事長 川上龍太郎





活動紹介

1月活動実績

3日（土）九州大学食糧化学工学分野新年会（川上、里山）

8日（木）いのうえ農園訪問（川上）

無農薬レモン栽培、耕作放棄地の活用などの情報交換及び会員加入

16日（金）鶴見運送定期訪問（竹田津）

16日（金）保育園向け商品に関するニーズ調査のための企業訪問（川上）

20日（火）ママミール社定期訪問（川上、竹田津）

新商品の企業型保育園のニーズ調査結果報告及び学校給食への対応に関する打ち合せ

23日（金）森光商店定期訪問（川上、竹田津）

高オレイン酸大豆に関する現状の取組等の確認他

★未来を担う理科好きの子どもへの事業：実験教室

日時：1月6日（火）13時～15時

場所：[あすみん（福岡市中央区今泉1-19-22 西鉄天神クラス4F）](#)

テーマ：ぷよぷよを科学する！

満足度120%で終了いたしました！

【今後の予定】

2月16日（月）森光商店定期訪問（川上、竹田津）

協議会及び高オレイン酸大豆に関する最新状況確認他

2月20日（金）鶴見運送定期訪問（竹田津）

他所蔵置による実績のための現状確認と乙仲等準備

2月26日（木）ママミール社定期訪問（川上、竹田津）

保育園向け新商品の課題と対策に関する打ち合わせ他

理事会開催予定（日程未定）

★未来を担う理科好きの子どもへの事業：実験教室



日 時：2月22日（日）13時～15時
場 所：[あすみん（福岡市中央区今泉1-19-22 西鉄天神クラス4F）](#)
テーマ：[飛び出せ！3Dを科学する](#)

詳しい内容
お申し込みはテーマをクリック！

日 時：3月 8日（日）13時～15時
場 所：[あすみん（福岡市中央区今泉1-19-22 西鉄天神クラス4F）](#)
テーマ：[見えない空気のパワーをみやぶれ！](#)

日 時：3月26日（木）13時～15時
場 所：[あすみん（福岡市中央区今泉1-19-22 西鉄天神クラス4F）](#)
テーマ：[フルーチェ・ラムネ：～おやつでわかる化学のカ～](#)



定期訪問は、「生き食べ未来」とコンサルティング契約を締結しているために行うものです。





コラム：私の提言

生かされているよろこび

ことしも新しい年を迎えることができた。何よりもうれしく思います。自分ごとを書くのは忍びないが
あえてしたためました。

頸椎動脈乖離による脳梗塞、心臓アブレーション手術も受けた。甲状腺腫瘍で右側の甲状腺を摘出して
いる。今は、肺、肝臓、腎臓、それに脾臓までが要経過観察である。病氣予備軍のオンパレード。嚥下障
害、歩行障害、手足のまひ、全てリハビリでここまで回復した。努力しないと寝たきりである。そこには
自助努力で克服するしかない。少なくとも人の数倍は努力した。そんな経験と「生かされた」現実がいま
ここに生きています。

近頃は人生の中で一番充実しているのではないかと思うときがある。死を意識して生きることで充実感
がある。時間がもったいない。朝は 5時過ぎには起きる。6時までに朝食を済ませ、9時までにはメールに
目を通し、日経新聞と西日本新聞、気になる記事はハサミで切り取り、電子版で読み返しデータ保存をす
る。9時からは読書と書き物である。書き物はほとんどが《生き食べ未来通信》の原稿である。ボケるこ
とを恐れ、忘れること以上に知識習得に努める。主治医が言った「川上さんは認知症にはならない」と。そ
れを励みに毎日のルーチンが続く。昼からはお決まりコースの散歩、週 2回はリハビリの通院である。土
日が無い生活にも慣れた。退職後、「することが無い」と嘆く人がいる。もったいない話だ。体が動けば
農業を始めてみる。退職後農業を始めた会員がいる。彼は故郷を離れ職場があった愛知で充実した毎日
を送っているようだ。

去年は、台湾、西安、そして、大阪・関西万博、北海道は 9月と10月 2回も行った。動けるときに行く、
そのため、借金は無いが貯金もない。使い切ると割り切れれば楽になる。孫子には何も残さない。思い出と
遺伝子だけを残すことになる。最近読んだ本に「生きものが生きる目的は、遺伝子を繋ぐことである」と
記載があった。「遺伝子を繋ぐのは個体だけでなくハチやアリのように種として遺伝子を残すこともあ
る。」妙に納得する。

思い立ったらすぐ実行。時間が無いと感じています。昨年、中国に行っていて良かった。高市首相の発
言以降、中国に行くのは難しい。旅行会社が中国旅行を中止しているのだ。ことしは戦時中に母が暮ら
した北京近郊の張家口、そこから見える万里の長城。行きたかった。できることは日中関係の正常化に期待
し、それまで健康を維持するだけである。昨年 10月に行った根室。[1月 7日 日経新聞朝刊「まちの未来
図」](#)（次頁に記事）でとりあげられた。2, 3時間に一本の不便な花咲線であるが沿線で見える太平洋、霧多
布の湿原、エゾジカとの出会い。途中下車の厚岸、駅前の食堂の牡蠣料理、地ビールがあれば厚岸ブラン
ドのウィスキーもある。北海道で最後に残された旅先のような。ことしは道東、根室に光が当たる。旅番
組や新聞、サンマ豊漁の記事、根室のサンマが旅に誘うのである。行ったことがあれば、思い出し余韻に
浸る。「押し活」に熱を挙げる人がいる。何に価値を置くのか、人それぞれです。私は、「旅ができる、
機上から景色を眺める」、そこに価値を見出し、そこで生かされているよろこびを感じるのです。

川上龍太郎

JR花咲線は雄大な自然のなかを走る=根室市提供



日本の本土最東端、北海道根室市が中核となって進めるJR花咲線の活性化策が、実を結びつつある。人口減で利用者が減るなか、観光路線を前面に打ち出すことで道内外のファンを獲得している。根室市の動きにJR北海道や沿線自治体、地元企業なども呼応し、存続が危ぶまれるローカル線を「資産」として再定義する試みが続く。

原生林を抜けると、太平洋へと突き出す海岸が視界に入る。花咲線沿線は雄大な自然に囲まれ、オオワシやタンチョウといった希少動物が生息する。車窓から見える景色は刻一刻と変わり「さながら地球探索の旅をしている気分を味わえる」（根室市の担当者）。



釧路駅と根室駅を結ぶ花咲線は全長 135キロメートル、片道 2時間半のローカル線だ。JR北が単独では維持困難とする「黄線区」として同路線を指定したのは 2016年。根室市は鉄路を維持しようと沿線自治体との協議を重ね、観光需要の開拓につながる施策を起案。花咲線を「地球探索鉄道」としてリブランディングする戦略をとった。

観光利用を促す根室市などの案にJR北は全面協力してきた。例えば、別寒辺牛湿原や落石海岸など景観が特に美しい区間では列車を低速で運行。全地球測位システム（GPS）を使い、位置情報に基づきスマートフォンで音声ガイダンスを聞けるようにした。日本語に加え、英語や中国語、韓国語で沿線の見どころを案内している。





コラム：私の提言

中国は王道の選択を、私たちは大人の付き合いを。

高市首相の「台湾有事」発言が多方面にわたり影響を及ぼし始めた。2026年は更に中国人観光客の激減など影響が拡大することを危惧している。トランプ大統領はベネズエラを攻撃した。そして、グリーンランドにも触手を伸ばそうとする。アメリカが「平等・民主・自由」の理念を掲げながら霸道政治を行うのであれば、中国は仁や義、礼などの古代思想を参照した「公平・正義・文明」という価値観を掲げるべきなのだ。

中国の学者が看破している。アメリカで学び現在精華大学教授である閻学通（えんがくつう）氏はその著『歴史の慣性』のなかで、「2023年には、中国はアメリカと同じレベルの超大国になる。それゆえ中国には、国際新秩序を構築する物質的なパワーだけでなく、新秩序に安定をもたらす国際規範再構築の論拠となる新しい思想が必要になる」と述べている。閻氏は、「歴史上、中国が大国化した時代には、必ず『王道と霸道』の思想が浮上する。王道が権威と物質的影響力で国際社会を主導すると考えるのに対し、霸道は力を信奉するのみである。アメリカこそ霸道の国である。中国は欧米中心の政治的自由主義を受け入れられない。また、経済的利益だけを求める経済的実用主義でも限界がある。中国が採用すべきは王道である。」としている。中国が大国だった唐の時代に日本には遣唐使を唐に派遣し、最先端の技術や文化を学んだ時代があった。日本にとって「王道」の国であり、西安には阿倍仲麻呂の記念碑があり観光名所となっているのである。

『新思想』によってはじめて、習近平が目標とする「中華民族の偉大な復興」は実現し、国際秩序をわが物にできる。まさしく、中国版アジア主義にこの思想が全面展開されている。

中国にとって、「近代」とは、欧米中心の屈辱の歴史にほかならない。200年近くにわたり、欧米の強国に追従するか独立するかしかなかく、中国は、アヘン戦争以降、国際社会で弱小国に甘んじなければならなかった。それは、本来の自己像を著しく歪めたものである。中国は漢帝国に代表されるように、超大国なのが「本来」の姿なのであり、近代以降の200年こそ例外的な時代に過ぎなかった。この国家像が習近平を支えている思想である。しかしながら、中国は、近代以降、国際社会をリードする実務経験が無く、リーダーとしての経験をもっていないのである。この本来の自己像と実際の経験の未熟さが生み出す齟齬こそが決定的に危険であり、それが国際秩序を乱す要因となってくる。アメリカに恐怖をいだき、日本すら過度に恐れる。軍事大国化を目指すのは領土拡張ではなく、防衛なのである。

中華人民共和国は共産党が牽引し、共産主義を具現化する国家として成立した。そこでは、

公平と正義を重んじ、全体として国民全体が歩調をあわせ成長・豊かになることを目指していた。今でも根底にはその思想が生きており、習近平が標榜する「14億の民を飢えさせない。」は、本当にそう思っているであろう。

中国は今砂漠の緑地化、太陽光発電、電気自動車、有機農業、世界一の規模で取り組んでいる。日米欧は過剰生産が価格低下を招き貿易摩擦を引き起こすとしているが、中国は世界的課題への対策を率先して取り組んでいるだけなのである。「緑の長城」を築く。砂漠の周辺に森林ベルトを作り砂漠化を防ぐことで、既に3000万haの緑地化に成功している。中国は建国時に比べ15%も森林が増えている。砂漠化防止の成功事例はアフリカで応用され、エチオピアなどで緑地化に成功した。中国の率先した地球温暖化対策は「王道の兆し」を示しているのである。

日米欧が中国を蔑むのは、植民地時代の思想的な負の遺産である。直接の経験はないが「蔑む心」が無意識のうちに残っている人がいる。それらの人にとって中国が自分たちを超えることは許されず、いつまでも中国は見下す対象でなければならないのである。親の世代から嫌中思想が引継がれている。これがある限り、中国を敵対視するのである。人が集まり、中国に好意的な発言をすると寄って、たかって、たたかれる。SNSでの中国批判は恥ずかしいことである。

中国で、旅行ガイドが「中国は日本から学んだ。良いことは取り入れ、悪いことは反面教師にした。」と言った。日欧米の文化は日本を通じて学んでいるのである。

そろそろ、トランプのアメリカをみるにつけ、中国に対して正面から自分の目で見、確かめ、正しく隣国として付き合っていくことを考える時期に来ています。私たちは、これから大国となった中国と大人の付き合いをしましょう。

川上龍太郎





コラム：私の提言

不登校は本人、親の責任であり、子どもの躰は大人の責任である。

文部科学省の 2024年度全国調査によれば、年間 30日以上欠席した不登校の小中学生は 35万3970人、12年連続で増え続け、これは過去最高人数で全体の 3.9%という。どんなに対策を打っても生徒数減少の中で増加しているのである。

15年間スクールカウンセラーを続けている臨床心理士が、「過剰適応」が大きな原因ではと述べていた。

子どもが失敗しないように大人が先回り。通塾や習い事などを親が決める場面も多い。そうすると、子どもが、自分で考えて選び取る経験が乏しいまま成長し、学校では教員の指示待ち状態。周囲に合わせることを優先し、人間関係に気を使い「空気」を読む。目立ったり、批判を受けたりするのを極端に怖がる子どもたちがいる。本来の自分と矛盾し、無理が生じている、不登校のほとんどは、本人も学校に行けなくなる理由がわからない、学校生活の中で蓄積した疲れや将来への不安や焦りが、だるさが体の不調に現れる子どもが多いという。

学校に行きたがらない子どもを別室で受け入れる「校内教育支援センター」を長崎で運営する NPO法人「子どもの権利オンブズパーソンながさき」が市内の公立小中学校に設置された別室に支援員を派遣している。そして「学校は不登校の要因について、家庭や子ども本人に問題があると考えるパターンが圧倒的に多い」この認識のままでは、教員たちの目が教室の在り方に向きにくくなると危ぶんでいる。「まずは学校側が自らの問題だと認識することから」とし、学校側、教職員側が自らの問題であるとの意識を持つことが重要ではないか」と述べている。これは順番がおかしい。「戸塚ヨットスクール」は今でも健在なのである。

私は、学校に行かないのは子ども本人であり、教育を受けさせる義務があるのは親であり、責任はだれかと問われれば、「親」という答えに何ら狂いがないと思う。

国は、将来、日本にとって『有益な人』となるために、義務教育を課しているのである。そのために、親だけではできない「日本人としての生きていくための力」をつけるため、言語、知識、スキル、そして考える力、文化、風習など最低限を教えるのである。「学校に行かなくても良い。」という親がいる、代替策を講じていなければ、無責任な発言である。学力をつけさせるのは学校でなくても充分可能であるが、学校でしか学べないことがある。それは、社会の中で生きていく術である。不登校を病気のせいや家庭環境、学校や社会のせいにしてしまっても、何も解決しないのである。

原因は必ずある、しかしながらその原因を取り除くのは困難な場合が多い。長崎の「校内教育支援センター」が述べている「学校側、教職員側の自らの問題であるとの意識を持つことが重要だ。」では何も解決しないのである。できない言い訳をしているだけである。

けんか、いじめ、差別、パワハラ、セクハラ、児童虐待全て無くせ、「正論」であり、否定はしない。それでも現実において、どんな対策を講じてみてもそれらは無くならない。本能にかかわる行為を理性で制するのは大人でも難しい。それらに打ち勝つこと、強い心を持たせることこそが解決の近道である。人との付き合い、社会に出れば誰もが経験することである。处世術＝生きる力を子どもにどこで身に付けさせるのか、そのことを問い、解決策を見出す。学校が力を入れるべきは論（さと）すことである。

先日バスで隣の席に座っていた老人が立ち上がり小学生に座席を譲った。本末転倒である。私は咄嗟にその老人を叱ってしまった。「小学生は立たせる、それが躰・教育である。」周りがシーンとなった。私は「子どもを甘やかさないこと。子どもの誤った行動にはその場その場で諭す。自信をもって叱る。大人の未来世代に対する責任であり、それがいま必要なことである」と信念をもっているのである。



伝えたい、紹介したい記事

さらば秀才、鍛えろカラダAI時代備え月10万円保育園に殺到

α -20億人の未来④

教育



日経新聞2026年1月4日 5:00[会員限定記事] 画像含む

AI時代に備え、生身の体の重要性に再び光が当たる（2025年11月、東京都武蔵野市のbiima school吉祥寺校）

なぜ今、カラダを鍛える教育なのか



11月の晴れた朝、公園で遊んだ子どもたちが室内運動場に入ってきた。休憩を挟んで更に1時間、サッカーのドリブルをもとにした運動で体の使い方を学ぶ。

保育園「biima school」吉祥寺校（東京都武蔵野市）は2024年3月開園した。「正解の分からない時代には基礎体力や（意志・感情・社会性に関わる）非認知能力の鍛錬が生きる土台になる」と野辺健一郎園長は強調する。保育料は自治体補助を受けても月10万円ほどかかるが、運営する2園で計約50人がキャンセルを待つ。

背景にあるのは α （アルファ）世代の子を持つ保護者の不安だ。「入園説明会では繰り返し『どんな力をつけさせればいいのか』との声上がる」（野辺園長）

20年代に性能を急速に高めた生成AI（人工知能）が大きな不安の種をまく。早晚、知能面で人はAIに太刀打ちできなくなる。教育に何ができるのだろう。

人工知能学会会長を務める慶応大の栗原聡教授がヒントをくれた。「生成AIはアンコの詰まっていない巨大な薄皮まんじゅうだ」

世界の知識を総動員して応答するAIは万能に見える。でも「そこには人なら当然ある『生きたい』という動機や欲求がない」（栗原氏）。生きる実感を持たないAIから人生の幸せや目的というアンコの味を教わるには限界がある。

校内「法廷」で問題解決学ぶ

台湾・台北市の近郊。亜熱帯の木々に囲まれた「種籽親子実験小学校」には、子どもたちが開く「法廷」がある。

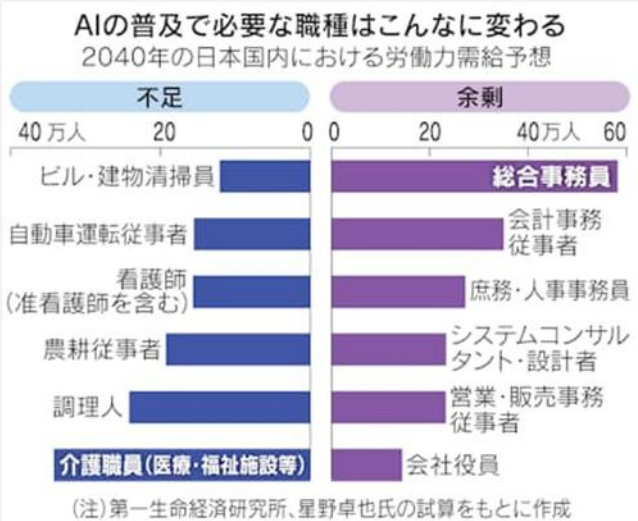


台湾の種籽親子実験小学校では、けんかやもめ事を解決するための「法廷」が子どもたちの手で開かれる

「Aさんが自分を変なあだ名で呼ぶんです」「Bさんが嫌がってるなんて、知りませんでした」

事実を認定したり論理的に説明したりする能力を育むほかに「法廷」では大切な学びがあると葉拓吾校長は考えている。「互いの気持ちを理解すること。それができてこそ、問題の解決方法を話し合える」

同校は台湾の初代デジタル担当相を務めたオードリー・タン氏の母親、李雅卿氏が創設したことで知られるが、プログラミングや AIを教育の目玉には据えていない。「子どもが自らの感情や身体感覚をたよりに、自分は何者か、何をしたいのか考えるようになることが大事だ」（葉氏）



頭脳偏重から肉体と感性重視へ。価値観の変化は日本でも着実に進む。

第一生命経済研究所の星野卓也氏が試算したところ、2040年代には事務員や営業・販売員が余剰になる一方で介護や調理人、看護師などの労働者不足が拡大する結果になった。「身体を使う技術や技能を持った人材こそ足りなくなる」（星野氏）

高専生は「材料集め自ら作る」

入り江に養殖いかだが浮かぶ三重県鳥羽市。鳥羽商船高等専門学校5年の北仲一登さん（20）、鈴木ライヤさん（同）らはカモの食害から養殖ノリを守るシステム「めたましーど」を開発した。AIでカモを画像認識し、レーザー照射などで追い払う。25年に出場した高専対象の全国コンクールでは、ビジネスアイデアとして1億5000万円の評価額がついた。

高専は1962年の初設立以降、日本のものづくりを支えてきた。中学卒業後の5年一貫で高度な専門知識と技能を身につける場として、近年再び脚光を浴びる。「失敗していいからやってみる」（鳥羽商船高専の江崎修央教授）のが学生気質。課題が出ると「大学生は本を調べる。高専生は100円ショップで材料を集め、自分の手で作る」。



「めたましーど」の本体を持つ鳥羽商船高専5年の鈴木さん（手前左）と北仲さん（同右）、指導した江崎教授（三重県鳥羽市）

「人は現場でこそリアルな課題を知る」（北仲さん）。「AIをうまく使う側にならないければ」（鈴木さん）。α世代もきっと自分の手と体を動かし学ぼう。大人の役目は最大限の機会を提供することだ。





「脱炭素」が生む新たな環境負荷 カーベ・マダーニ氏

国連大学 水・環境・保健研究所長

環境

[日経新聞2026年1月14日 18:00\[会員限定記事\]](#) 画像含む

地球環境への貢献という意識から、電気自動車（EV）が人気を集め、太陽光や風力といった再生可能エネルギーの利用が拡大している。人工知能（AI）をはじめとするデジタルテクノロジーは社会の効率性を高めている。

Kaveh Madani イラン環境庁副長官、国連環境総会副議長などを経て、2023年から現職



グリーンでもデジタルでもトランジション（移行）は社会により良い変化をもたらし、利益を生んでいる。だが、ほとんどの人はサプライチェーン（供給網）の下流にしか目を向けていない。その全体にわたって、トランジションが持続可能かどうかを認識し、コストを自覚し、不公正さを解消する必要がある。

たとえば、サプライチェーンの上流にあるのはレアアース（希土類）やリチウム、コバルトといった重要鉱物だ。これらはEVや発電設備、バッテリーには欠かせない。世界各地急ピッチで採掘されているが、採掘地の多くで水質や土壌が汚染されており、住民の健康被害が懸念されている。

南米ではリチウム開発のために大量の水がくみ上げられ、生活用水や農業用水の確保が難しくなっている。気候変動で干ばつも頻繁に起きる。水力発電で電力をまかなえずに化石燃料に頼ったり、動力でより深い場所の地下水をくみ上げたりしている。グリーン移行で重要鉱物の採掘が増え、それが環境汚染や水不足、温暖化ガスの排出につながっている。

デジタル移行もほとんど意識されないまま環境に大きな負荷をかけている。

AI導入は金融取引やビジネスに変革をもたらしている。同時に膨大な情報を高速で処理するAIサーバーは大量の電力を消費しており、その冷却のために信じがたいほどの水を使っている。これらの副作用をもっと意識する必要があるだろう。

国連大学水・環境・保健研究所は、暗号資産（仮想通貨）のビットコインのマイニング（採掘）がどれほどの環境コストをもたらすかを調査した。

マイニングは石炭火力で発電された電力に依存し、その温暖化ガスの排出量は2020～21年で約8600万トンにのぼる。相殺するには約39億本の樹木を植える必要があるほどの排出量だ。水のフットプリント（環境への影響）も大きく、約1兆6500億リットルにもなった。これはサブサハラ（サハラ砂漠以南）での3億人分の家庭用水消費量を上回る。

グリーン移行やデジタル移行が悪い方向だとは思わない。イノベーションは常に新たな利益を生んでいる。重要なのはその効果だけではなく、副作用にも目を向けることだ。環境負荷を研究し、情報開示を進め、適切に管理していかなければならない。

新技術の導入で効率性が高まったからといって、環境負荷がゼロになるわけではない。オンライン会議システムが一例だろう。確かに会議に参加するために飛行機や車で移動するより環境負荷は小さくなった。しかし、音声に加えて映像も伝送するオンライン会議が広がったことで、動画を送るために大量のデータ通信が必要になり、電力や水の消費量が増えた。会議中にカメラをオフにするだけでフットプリントを約90%削減できるのだが、ほとんどの人はそれを知らない。

グリーン移行やデジタル移行に伴う環境負荷の大きさを多くの人が認識することが重要だ。サプライチェーンの上流では環境汚染や水不足が深刻さを増し、最終段階では使われなくなったスマートフォンやバッテリーなどの電子ごみの処理が課題として残っている。

インターネットに接続する人口は増え続け、AIの利用は急拡大している。一人ひとりが環境負荷を認識し、これまでの行動を変えることで、経済社会の持続可能性は高まるはずだ。（カーベ・マダーニ氏談）

水の管理課題に

AI向けの大規模なデータセンターは人口 5万人の都市と同じぐらいの電力と水を使う可能性がある。アイルランドは首都ダブリン都市圏でのデータセンターの新設を実質的に制限した。電力の供給力に不安が生じかねないうえ、地域社会で夏場の水不足への懸念がくすぶっているからだ。

膨大なデータを処理する AIサーバーは発熱量が大きい。冷却効率が空冷式より高い水冷式の導入が急増している。国際エネルギー機関（IEA）はデータセンターを運営するために世界で年間に約 5600億リットルの水が使われており、30年には約 1兆 2000億リットルに増えると予測している。

気候変動で水の循環は不規則になり、ただでさえ供給は不安定さを増している。データセンターの新增設が相次ぐ米欧や中国、インドでも干ばつが頻発する。食料の生産や日常生活に直接関わるだけに、水不足は人々の不満や争いを呼び込みやすい。持続可能な水の利用を定めた基準や枠組みを整えなければ、環境負荷がAI活用の妨げとなりかねない。（日経新聞編集委員 下田敏）

日本ではほとんど話題にさえ、なっていない現実がある。 脱炭素、レアアース、リチウム、コバルト、手段が目的化し、環境を破壊し、AIが電力・水不足を招く。（川上龍太郎）



農産物輸出に甘くない現実、ブドウは2割減 ブランド戦略で後手

農業

[日経新聞2025年12月3日 2:00\[会員限定記事\]](#) 画像含む

今年のシャインマスカット輸出は、他国との価格や品質の競争が激化して過去最大の落ち込みとなりそう



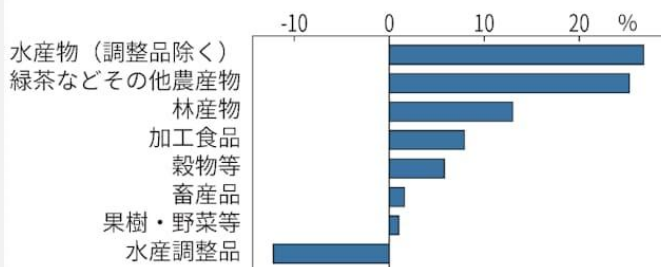
果物や野菜といった青果物の輸出が鈍っている。1～10月の輸出額は前年同期比 1%増にとどまった。けん引役だったブドウは年間で過去最大の落ち込みとなる公算が大きい。看板品種が次々と流出するなか、他国産「コピー品」との競争をふまえたブランド戦略が整っていない。好調な農林水産物全体の輸出も失速しかねない。

政府は 2030年に農林水産物や食品の輸出額を 5兆円にする目標をかける。24年は 1兆 4092億円（少額貨物を除く）と過去最高を更新した。農林水産省が

2日発表した輸出統計によると、1～10月は前年同期比 15%増の1兆 2914億円と好調だ。

成長の主役は海外でブームの日本酒や緑茶など。近年順調に伸びていたブドウやリンゴはここに来て勢いを失っている。「果樹・野菜など」の 1～10月の輸出額は 1%増の 533億円だった。24年年間は 9%増で、伸び率が縮小している。

果樹・野菜などの輸出が伸び悩む



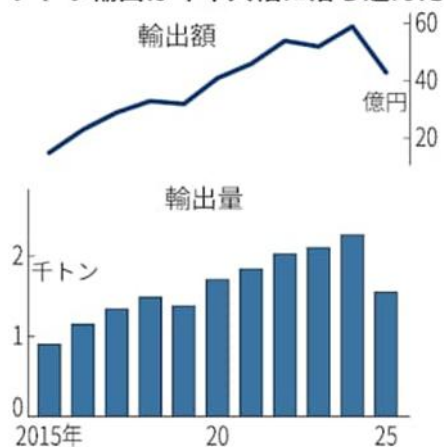
(注)25年農林水産物・食品輸出額（1～10月）の前年同期比

(出所)農林水産省

「輸出先に『韓国産の方が安くて質も良い』と言われた。こんなことは初めてだ」。シャインマスカットを台湾などに輸出する大田市場（東京・大田）の仲卸は戸惑う。

ブドウで主力高級品のシャインマスカットは主な輸出先の香港や台湾で販売が落ち込んだ。ブドウの輸出額はシーズン終盤である10月までで42億円と前年同期比20%減った。輸出货量も22%減だった。

ブドウ輸出は今年大幅に落ち込んだ



(注)25年は1～10月の合計

(出所)農林水産省

輸出鈍化の原因は10年近く前に起きた苗の流出に遡る。種なしブドウのヒット作であるシャインマスカットは06年に国内で品種登録されたものの、海外での品種登録は進まず、17年ごろに中国や韓国に苗が流出した。流出前は日本の生産者や研究者の多くが国内市場を重視し「海外で品種を登録する意識が乏しかった」（農水省）ためだ。

「生産技術を持った貴重な人材も中国と韓国に流れていった」（市場関係者）との指摘もある。

中・韓では栽培面積が年々拡大し、香港や台湾の市場で日本と競合するようになった。安価で一般消費者向けの中・韓産に対し、高級品で贈答用の日本産といった一定の「すみ分け」はあったが、今年に入りその優位性が揺らいだ。

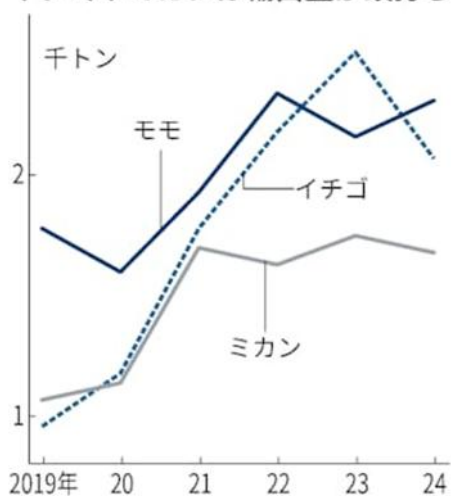
夏の猛暑で生育不良が広がった上、国内産地が増えて品質のばらつきが目立つようになったためだ。ある青果仲卸は「輸出先が求める高級品用のサイズや品質に対応しにくくなっている」とこぼす。

青果仲卸のカネブン青果（東京・大田）の鈴木大樹社長は「韓国は政府主導のもとで産地間や商社が連携しており、相手国の需要に合った商品を提供できている」と指摘する。

政府は21年に改正種苗法を施行し種苗の持ち出し制限を可能にしたが、すでに流出した品種での知財保護は困難だ。桃山学院大学の浜島敦博教授は「他国との競合を見据えた輸出戦略を早急に立てる必要があったが、実際には遅れている」と話す。

日本では過去にもイチゴや温州ミカン、和牛などが流出した。イチゴは「紅ほっぺ」などの苗が中国や韓国に流れ、各国の店頭や電子商取引（EC）サイトで売られていた。日本の輸出は23年まで増えていたが「他国産の品質向上で販売環境が厳しくなり、24年は大幅に減った」（都内の輸出商社）。ミカンの輸出も頭打ち状態だ。

イチゴやミカンは輸出货量が頭打ち



(出所)農林水産省

農業経済学に詳しい明治大学の作山巧教授は「日本産のブランド力が落ちている。気候変動や高齢化による生産力の低下は著しく、政府が農家へ直接的に支援する必要がある」と警鐘を鳴らす。

ブドウやミカンなど他国との競合が前提にある品目は「価格競争に乗らず『日本産は絶対に高品質』という評価を改めて確立するしかない」（作山氏）。そのためには産地間で広がる品質差を縮める必要があり、農水省が音頭を取って栽培条件や品質などの基準を定めることが重要という。

農水省は23年から日本青果物輸出促進協議会（東京・千代田）に委託してサツマイモ輸出におけるリレー出荷を実証。産地間でサイズや包装を統一しながら、出荷時期がかぶらないように計画出荷を試みた。25年からはイチゴでも同様の実証試験に取り組む。

ただ、現状は予算や人員に限りがあり、取り組みの対象品種は限られている。ブドウを含む多くの青果物の品目で30年の輸出目標を達成するメドは立っていない。国内市場が縮小の一途をたどるなか、関係者の連携などが欠かせなくなっている。（加藤真央）



「絶滅寸前」繰り返した人類 寒冷化で世界人口が99%減った時代も

環境

日経新聞2025年10月16日[会員限定記事] 画像含む

人類は近代以降に科学技術の力を手に入れて繁栄を遂げたが、温暖化や環境破壊も引き起こした。多数の動植物を絶滅に追いやる人類の振る舞いはまるで地球の支配者のようだ。だがいくつかの科学研究は、その人類が何度も絶滅の瀬戸際に立たされてきた可能性を指摘する。寒冷化のために大人が世界で99%も減ったり、火山噴火が原因で強烈な紫外線が降り注いで人口が減少したりしたという。長い時間のスケールでみると地球の環境は想像以上に不安定なのかもしれない。

気候の寒冷化などで世界の人口が繰り返し減ったかもしれない。

グリーンランドの氷床=ロイター



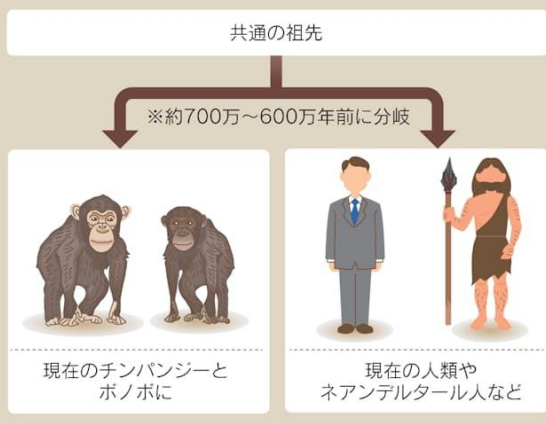
現代人のホモ・サピエンスがまだ誕生していない約90万年前。人類は子孫を残せる大人が世界でわずか1300人ほどに減り、絶滅の危機に陥った――。中国科学院やフィレンツェ大学などが2023年に発表した研究成果は、文明が繁栄する現代からみると信じがたい内容だ。論文を米科学誌「サイエンス」に掲載した。

研究チームはアフリカや欧米、アジアなどで生まれた約3000人の現代人のゲノム（全遺伝情報）を調べ、祖先の数を推定した。一人ひとりが持つDNAは時間の経過とともに一定の確率で突然変

異を起こし、遺伝情報を載せた塩基の配列が変わる。そのため各地に住む人々の配列の違いを調べれば、過去の人口を推定できる。違いが小さいほど人口が少なかったことになる。

この研究によると約 93万～81万年前には、人類のうちで子孫を残せる大人は世界でわずか約1300人まで減っていた可能性がある。中国科学院のリー・ハイペン教授は「人類は絶滅の寸前まで追い込まれた」と考えている。10万人ほどの大人が暮らしていた約 100万年前に比べると、実に人口の 99%が失われた計算だ。人口が極めて少ない状況は10万年間以上も続いたという。

人類はチンパンジーなどとの共通祖先から分かれて誕生



中国科学院などの研究には限界もある。この時代は人類の化石や遺跡が少なく、当時の状況を詳しく知るのは難しい。人類の進化に詳しい東北大学の佐野勝宏教授は「（当時の人類の主な生息地域だった）アフリカで人口が減った可能性は高いが、この論文が示す人数は計算上のものだ」と解説する。当時の世界の人口を推定するうえで不確定な要素は少なくないが、減少していたのは確かなようだ。

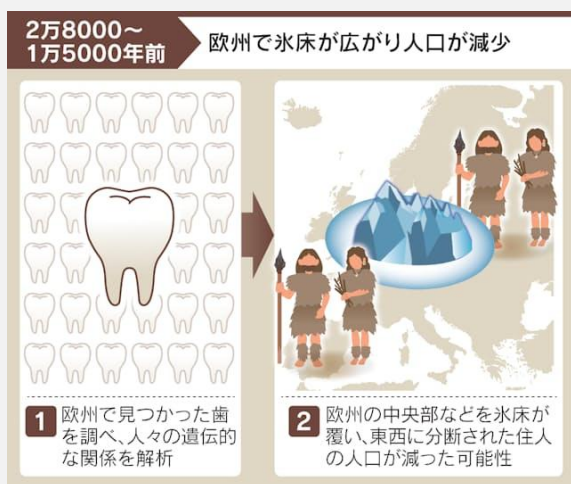
研究チームが人口減少の始まった時期とする約 90万年前は、地球が周期的に繰り返す氷河期に入った時期だと考えられている。気候の寒冷化で動植物の分布が変わり、食料の調達が難しくなるなどして人口減につながったのかもしれない。

人類は約 700万～600万年前にチンパンジーやボノボとの共通祖先から分岐して誕生したと考えられている。その後、原人やネアンデルタール人なども現れた。ホモ・サピエンスは約 30万～20万年前に登場したとされる。

その現生人類も大幅に人口を減らしていた懸念がある。約 7万 5000年前にインドネシアのトバ火山で起きた巨大噴火が人口減少につながったと指摘する研究者もいる。この噴火は人類の誕生以降で最大級ともいわれる。

ドイツのマックス・プランク化学研究所などが 21年に発表した研究によると、この噴火で熱帯地域のオゾン層が破壊され、有害な紫外線が 1年以上も地上に降り注いだ可能性がある。紫外線の強さは最大で世界保健機関（WHO）が「皮膚がんや皮膚が損傷するリスクが高まる」とする値の数倍に達したという。

同研究所のセルゲイ・オシポフ博士は当時の人類が受けた紫外線による健康被害について「今後懸念される大規模な核戦争よりも甚大だったかもしれない」と説明する。白内障や皮膚がんの発病率が高まるなどして人口が減った恐れがある。論文を科学誌「ネイチャー・コミュニケーションズ」に掲載した。その後も災難は続いた。ドイツのチュービンゲン大学などは数万年前に訪れた最後の氷河期の影響で欧州の人口が大幅に減ったとする研究を 24年に発表した。科学誌「サイエンス・アドバンシズ」に論文を掲載した。



研究チームは欧州の各地でみつかった 4万7000～7000年前の 450個の歯の標本を調べた。遺伝的に近い人々の間では、歯の細かい形などの特徴が似通う。人工知能（AI）で歯を分析すると、寒さが特に厳しかった 2万 8000～1万 5000年前に人々の遺伝的な多様性が低下していた。

チュービンゲン大のジュディス・バイヤー博士は「この時期には欧州の北部や中央部のほとんどを氷床が覆っていた」と解説する。研究チームは氷床で欧州の人々が東西に分断されるとともに、それぞれの地域で人口が大きく減った可能性があると考えている。食糧が確保しにくくなるなどして人口減少につながったのかもしれない。

一連の科学研究は寒冷化などが人口減少につながった可能性を指摘するが、暖房や発電などの技術を持つ現代人と石器時代の祖先を単純には比較できない。温暖な現代は氷河期の合間にあたり、およそ5万年後には次の氷河期が訪れると考える研究者は多い。仮に地球が寒冷化すれば、食料の生産や人々の生活に大きな影響が生じる恐れがある。

地球温暖化や環境汚染、核戦争のリスクなど、現代人は足元で多くの課題を抱えている。だが時には視線をはるかな未来に向け、次の氷河期に生きる子孫たちの姿も考えてみたい。（松浦稜）



AIデータセンター、大量の水消費 懸念

米、50万人分「がぶ飲み」

政治・経済

[日経新聞2025年12月21日 2:00\[会員限定記事\]](#) 画像含む

人工知能（AI）の開発や運用に使うデータセンターの建設が米国で急増し、サーバーの冷却に使う水の大量消費への懸念が広がっている。米国のデータセンターの年間水使用量は660億リットルと日本の50万人分の生活水に相当し、なお増え続けている。建設地では住民が地下水枯渇と干ばつにおびえている。

米西部ネバダ州の砂漠に位置するタホ・リノ・インダストリアル・センター（TRIC）。東京 23区の約 7割に相当する敷地面積の巨大産業団地だ。30年前には水も電気も道路もなかったこの場所で米アルファベット傘下のグーグルやデータセンター運営の米スイッチなどが相次いで開発を進め、データセンターの集積地になった。

「この砂漠は生まれ変わった」。11月、産業団地の開発を手掛けるクリス・トンプソン氏は笑顔を見せた。同氏は「施設のうちデータセンターが占める割合は 25%ほどだが、将来的には 50%を超えるだろう」と話す。

建設ラッシュは作業員などを含め約 3万 5000～4万 5000人の雇用を生み、多大な税収を州にもたらすようになった。一方、一部地域への過度な集中は住民とのあつれきを生んでいる。

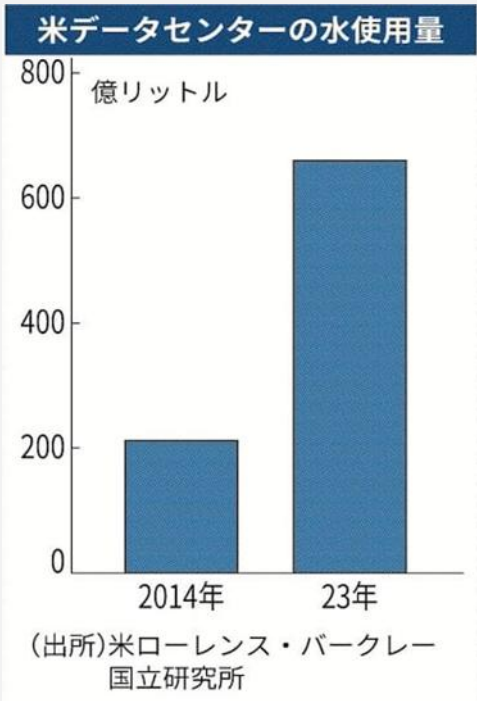
「データセンターは川の上流の近くで地下水をくみ上げている。州や郡、業者が関心があるのはお金だけで川の魚や我々に興味はないだろう」。TRICから車で 40分ほどのピラミッド湖畔に居留地をもつネーティブアメリカン、パイユート族のマービン・ライト・ジュニア元代表は嘆く。

パイユート族は地下水をくみ上げて生活用水を確保し、ピラミッド湖に流れ込む川の水を農業や畜産に活用している。

TRICで実際にどれほどの水を使っているかは開示されていない。だが、米科学技術誌MITテクノロジーレビューは、近隣も含め年間で数十億～数百億リットルもの水を消費する可能性があると推計している。

米農務省（USDA）によるとネバダ州のほぼ全域と周辺州の一部を含むグレートベyson地域の積雪量を水に換算した量は 1991～2020年の平均値から 68%減少した。州の調査によるとTRIC周辺の地下水位は年約 3～9センチメートルずつ低下している。

水資源保護に取り組む非営利団体のカイル・ローリンク氏は「これ以上使える地下水は残っていない」と警鐘を鳴らす。



米不動産サービス会社ニューマークによると 24年の米国のデータセンター建設への投資額は315億ドル（約 5兆円）に達し、開発中の面積は 5年前から 2倍に増えた。

米ローレンス・バークレー国立研究所によると米国のデータセンターが 23年に使った水の量は 660億リットルと 9年で 3倍に増えた。日本の人口 50万人分の年間の生活用水に匹敵する。電力や半導体の製造に使う水の量を含むとさらに膨らむ。

税金が安く、水と電力が豊富な土地は限られてきている。米ブルームバーグ通信によると、22年以降に建設または開発中のデータセンターの約 3分の2が水の貴重な場所に立地する。経済協力開発機構（OECD）は 50年までに世界の水の使用量は00年比 55%増え、人口の 4割以上が水不足に陥ると推計している。（ニューヨーク＝谷本克之）





脳科学で迫る幸せの秘訣

不安の神経関与、豊かさの「先」へ

政治・経済

日経新聞2025年12月21日 2:00[会員限定記事]

画像含む



幸福とは何か。人はどうすれば幸せになれるのか。哲学や宗教が扱ってきたこれらの問いに対する答えを、脳科学の研究が示し始めた。一人ひとりで異なる幸福感の高さに、脳の構造や神経活動などが関わっている可能性がある。研究が進めば経済的な豊かさや長寿を得るだけでは到達できない、より多くの人々が幸せに暮らす社会の実現につながるかもしれない。

脳の奥深くに幸せをつかさどる部位を見つけた——。理化学研究所の佐藤弥チームディレクターらが今年発表した研究成果は、脳科学者などの注目を集めた。頭頂部と後頭部の間にある「楔前部（けつぜんぶ）」という部位が、幸福感の高低に関わると突き止めた。米国の学術誌「ヒューマン・ブレイン・マッピング」に論文を掲載した。

理研はまず約 50人にアンケート調査を実施した。被験者は人生を振り返り、将来への期待も踏まえて幸福さの度合いを 8段階で回答した。次に被験者の脳を調べた。脳の神経が活動すると電気が流れて磁場が生まれる。その発生源などをセンサーで調べると、幸福感が高い人は楔前部の活動が穏やかだった。楔前部は自分を低く評価したり、将来の心配をしたりする時に活発に働く。活動が穏やかな人はこうした思考に陥りにくく、幸福感が高い可能性がある。



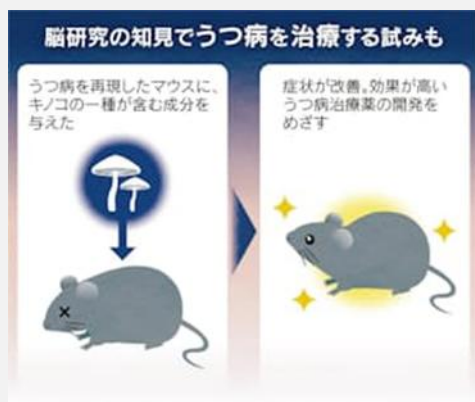
歴史を振り返ると、人類は哲学や宗教を通じて幸福の意味や幸せになる方法を追究してきた。古代ギリシャの哲学者たちは真理の探究や正義の実現を通じて幸福が訪れると説いた。中世以降も議論が続いたが、多数の人々が幸せを感じて暮らす社会をつくるのは簡単ではない。その現実を如実に示すのが現在の日本だ。

日本は平均寿命が世界トップクラスで、犯罪も少ない。戦乱や貧困に悩む国からみれば安全に長生きできる幸せな社会のはずだが、幸福度は低い。経済協力開発機構（OECD）が 10月までに更新した調査では「主観的な幸福感」のスコアが37カ国中で34位だった。幸せの秘訣を探すには、哲学などに加えて脳科学の知見も求められそうだ。

佐藤氏は脳で感情の処理などを担う「扁桃体（へんとうたい）」にも目を向ける。脳の血流を調べる機能的磁気共鳴画像法（fMRI）で約 50人を調べたところ、扁桃体と楔前部が連携して活動する人ほど幸福度が高かった。

家族や友人から手助けを受けると、人はありがたみやうれしさを感じる。佐藤氏はそんな感情を伝える情報が扁桃体から楔前部に流れると考えている。

脳が幸せを感じにくい人も、悲観するのは早いかもしれない。キノコの一つが含むシロシピンは楔前部の活動を抑える。幻覚症状を起こすために国内外で所持や使用を取り締まっている薬物だが、うつ病の治療へ応用を目指す研究も進む。



うつ病の人の一部は楔前部の働きが盛んだとされる。名城大学の衣斐大祐准教授は、うつ病を再現したマウスにシロシビンを与えると症状が改善すると突き止めた。脳の奥深くを狙って作用させれば、幻覚を起こさずに治療できる可能性がある。効果が高いうつ病治療薬の開発をめざす。

22カ国の総合幸福度で日本は最下位		
順位	国・地域	幸福度スコア
1	インドネシア	8.47
2	メキシコ	8.19
3	フィリピン	8.11
4	イスラエル	8.00
5	ナイジェリア	7.82
↓		
15	米国	7.18
↓		
20	英国	6.88
↓		
22	日本	5.93

(出所)ハーバード大の論文のデータをもとに作成 グラフィックス 稲野由子

進歩を遂げる脳科学は幸福に至る道の一端を示す可能性がある。ただ幸せの概念は主観的な側面を持ち、その内容には地域や文化によっても違いが生じる。脳や神経の研究だけでなく、アンケート調査で個人の幸福感を調べる社会心理学など様々な分野の知見を組み合わせる必要がある。

従来のアンケートは「自分が有能だと感じるか」など欧米の個人主義的な価値観に基づく質問が多かった。そこで米ハーバード大学をはじめとする研究チームは、アジアで重視される他者への信頼感の高さなどを加えた。

22～23年にアジアやアフリカを含む 22カ国・地域の 20万人以上を対象に 5年間の調査を始めた。ハーバード大のタイラー・バンダーウィール教授は「幸せを形作る要因を探る」と話す。4月に公表した幸福度のランキングではインドネシアやメキシコが上位に並び、日本は最下位だった。経済的に豊かな国の住人が幸せだとは限らないようだ。

幸せの秘訣を探す研究者らは科学的なアプローチを続けている。（岩井淳哉）



バンドネオン奏者 川波幸恵さんのクラウドファンディングへの協力依頼

福岡県宗像市出身のバンドネオン奏者・タンゴ演奏家の川波幸恵さんは第一回チェ・バンドネオン世界大会の優勝者で、福岡を中心に演奏活動をしている音楽家です。

当法人には設立の趣旨に賛同いただき、設立直後の2024年6月に入会いただきました。

その川波さんがアルゼンチンでタンゴ界の巨匠 ビクトル・ラバジェン氏を始めとする現地音楽家の皆さんと、ブエノスアイレスでレコーディングをすることになり、その費用を工面するためにクラウドファンディングを実施しています。画像はWebサイトより



つきましては、会員である川波幸恵さんの音楽活動へのご支援をお願いいたしたく、ご協力を何卒よろしくお願いいたします。

ご協力は以下のサイトからお願いします。

<https://yukiekawanami.com/works/>

川波さんのプロフィールは以下のサイトをご覧ください。

<https://yukiekawanami.com/profile/>





投稿コーナー：会員の方のご感想



会員の Tさんから『生き食べ未来 通信 1月号』へコメントを、竹田津副理事長経由で頂きましたので竹田津副理事長の返信も含めてご紹介いたします。途中改変などあります。

こんにちは。新年早々から膨大な資料の通信有難うございます。

実は……ので、学会通信をいただくことになりました。今回の内容に、ニュージーランドの女性の博士さんが、96歳なのですが、今年は最後の論文を仕上げる年にするそうです。驚嘆しました。

スウェーデンではリタイアした方々が、シニア大学で学ぶ人が増えているそうです。別に資格を取るということではなく、学びの幅を広げているそうです。

『生き食べ未来 通信』には敬服しておりますが、私も幅広い情報に接して、脳トレと思って読ませていただきます。宜しくお願い致します。

竹田津：

おはようございます。

今はそこら中に情報が溢れている時代になりました。

それらの中から正しい情報、必要な情報などを取捨選択する能力が大事かと。

一人ではその能力を高めるのは難しいですが、信頼のおける友人達から学べるかと。

しかし、今朝の番組で自分の悩みや不安や相談事を AIに相談する人が 4割前後と。

友達がいないんだなあ、とつくづくガッカリです。

とは言っても世の中を変える力はせいぜい選挙位なのでそこは大事にしようと思います。

これからも自分のライフワークである男声合唱を続け、広めていく為、今まで培ってきた知識とネットワークを地域、社会に感激するために、頑張っていくので暖かく見守って下さいませ。

そうですか。AIが大流行なのですね。私はその世界に多分関わっていないと思うので、貴重な情報に接せられることに感謝です。

実は今年の正月も息子がカリフォルニア産の数千本限定の〇万円のワインを持って帰ってくれたので、皆でお節を食べながら味わったのですが、ワイン情報を読ませてもらっていたので、納得して食とワインがすすみました。息子がワインは食べながらの方がワインの風味もより一層味わえるよと言ったので、普段、全く酒類は口にしない私ですが、美味しさで心まで満足することができました。

『生き食べ未来 通信』は、私にとっては知らない内容が多いですが、皆さんの取り組みに少しでも接していけたらと期待しています。ご苦労様です。

皆さんの論文みたいな報告というか、私たちへの広報メッセージに感動しながら、「沢山の食や関連の情報を有難う！」と言う気持ちで読ませて頂いています。本当に深～い内容で、地元、日本、世界、また今の時事問題が繋がりがあってるので、とてもホットな感じです。

皆様からのお声がけは、とても励みになります。今後も、ご紹介させていただきたいと思っております。



新規にご加入・ご寄付いただいた方

久留米市 M.Iさんご加入ありがとうございました。

加入ありがとうございました。





お知らせとご案内

【連絡コーナー】

会員からの投稿を募集します。wordで作成1,000文字程度

テーマは会員に役に立つと自ら判断するもの、ジャンルは問いません。
尚、コピーや生成AIで作成したものはお断りします。

掲載分について、謝礼として図書カードを贈ります。

右のリンクからでもお受けいたします。

これを機会に積極的な《生き食べ未来通信》への参加をお願いいたします。



info@npo-ikitabemirai.org



【新規のご加入について】

今年度から賛助会員の入会条件が変わりました。

ご寄付の金額が3,000円以上で賛助会員となります。

会員の加入条件は変更ありません。

従来通り、入会金5,000円、年会費3,000円 です。

尚、当NPOが主催するセミナーでの講師や《生き食べ未来通信》への投稿などを前提に入会する場合、入会金を免除することがあります。

2025年度の会費未納の方が多数いらっしゃいます。

2026年度分と併せての納入も可能です。



【今年度の会費納入とご寄付のお願い】

会費と寄付金振込先

福岡銀行 湊町支店（216） 普通1458561

西日本シティ銀行 港町支店（216） 普通3089256

名義：特定非営利活動法人 生きものと食べものの未来

年会費 法人：5,000円 個人：3,000円

※振込手数料は支払人負担でお願いします





◆推薦図書：

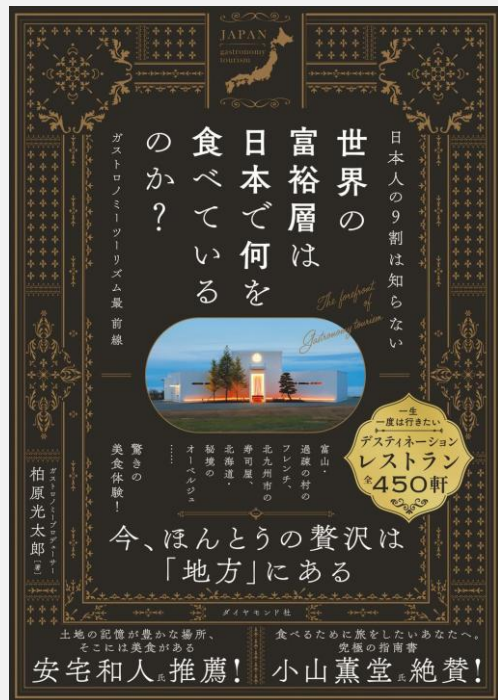
「地球を動かしている微生物のすごい世界」 著者：鈴木 智順（すずき ともりのり）発行所：青春出版社



鈴木氏は、東京理科大学教授で専門は系統微生物学、微生物生態学、環境微生物学、応用微生物学などである。微生物に関係した著書も多い。当会員で食品関係に関わっている人ならば興味を持つでしょう。

ほとんどの草食動物が消化を微生物に頼っていること、牛が4つの胃の中で最初の胃で微生物が植物に含まれるセルロースを分解し、自ら利用するだけでなく代謝物としてたんぱく質や糖、脂肪酸を作り出す。それが牛の栄養となる。4つの胃がそれぞれの役割を果し、牛と微生物の共生関係が出来ているという。大豆類は、根粒菌との共生関係で窒素を手に入れ、根粒菌は植物が作ったグルコースを分解し有機酸などの栄養を手に入れている。田んぼには、窒素固定細菌が存在、アカウキグサの裏面に共生するシアノバクテリアが窒素固定をするため、水の調整で窒素分が賄え、稲の有機栽培が可能になるという。地球温暖化対策にもプラスチックの分解にも微生物の力で可能になる。微生物を正しく知り、活用する。ためになる本です。

「世界の富裕層は日本で何を食べているのか？」 著者：柏原 光太郎 発行所：ダイヤモンド社



柏原氏は、ガストロノミープロデューサーであり、文藝春秋で「週刊文春」「文藝春秋」編集に携わり、「文春オンライン」を立ち上げた。業界きっての食通として知られ、独立後、「一般社団法人ガストロノミー協会」会長、農水省や北九州市などで食の魅力伝える活動を行っている。この本は、超グルメな人が満足する日本中の名店を紹介しており、私のような普通の生活者が行くことができるお店はほとんどありませんでした。

世界、そして日本の富裕層の関心がいま、都会から田舎へ、「そこでしか味わえない“レアな食体験”」へ静かに移り始めています。料理人も、海外の星つきレストランで腕を磨いたシェフや東京で予約困難な名店を手がけていた人が、あえて辺鄙な土地で地元の豊かな食材や食文化を生かした店を開く。そして、その店を目当てに世界中の美食家や富裕層が旅をする——そんな新しい潮流が日本各地で起きています。

本書は、いま富裕層が殺到している地方の名店やエリアをその背景とともに解説、さらに次世代の注目店やエリアも紹介しています。また巻末には「一生一度は行きたい日本のデスティネーションレストラン200軒」の紹介があります。

ガストロノミーツーリズムの最前線を知り、思わず旅に出たくなる、過疎地で人口減少に苦しむ田舎が蘇生するためのヒントが散りばめられている。こんな視点から読むとたとえ料理は味わえなくても役に立つ本でした。



編集後記

皆さんは、新年の抱負、覚えていますか。（く）は、この通信を書きながら思い出して、モチベーションを上げなければと思いました。振り返ることは、大事ですね💧

会員の皆さまからの投稿、引き続きお待ちしております。テーマは、環境・農・食、教育、福祉など何でも構いません。

また、企業のご紹介やイベントのおしらせ・よろずご相談などなど、どうぞお気軽に下記メールまでお知らせください。



info@npo-ikitabemirai.org

WEBサイト・FBページ・インスタ もあります。 マークをクリックして、覗いて見てくださいね！



（く）

令和8年 2月 発行責任者 川上龍太郎